

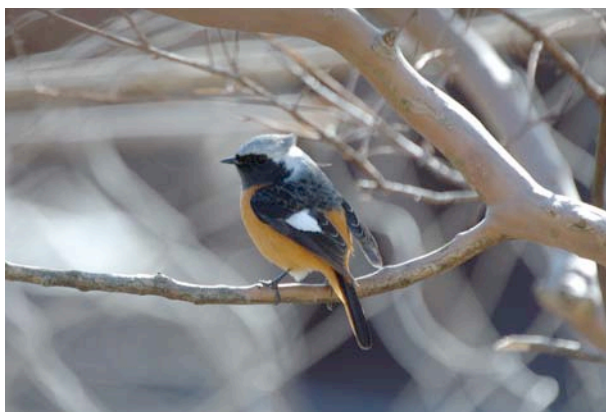
# ミサゴ便り

平成 19 年 5 月 20 日発行

弓削野鳥の会編集発行

写真で綴る身近な野鳥たち

愛鳥週間(5/10～16)特別号





(PH は弓削野鳥の会会員撮影による作品です。)

昨年と異なり、ことしはツグミ、シロハラがやたらと多い気がする。もちろん「ただそういう感じがする」という、バーダーとしては、はなはだ非科学的な言い方でしかないのが恥ずかしい。

ジョウビタキも気づけば姿が見えなくなっている。これとて毎日



ウォッチングしているわけではないので、決して「彼らがもう去った」と言い切れるものではないが自分の周りには姿が見えないので、独断で「去った」としてお

く。4月中旬現在、ということである。

年々ツバメの飛来が減っているという仲間みんなの共通認識だが、ことしの私の初ツバメは3月29日上弓削だった。そして2週間経ったいまやはり数えるほどしか飛び回っていない。

日本全国に飛来する鳥はそれこそゴマンといるので、運良く彼らと出会えれば「見た」「確認した」ということにしても、おとがめはなかろうと、勝手に思うことにしている。もちろん出会った鳥が何者であるかを、せめて図鑑等で確認することはバーダーの最低限の

マナーだと承知はしているつもりだ。

ところでタイトルの「肌で感じる環境異変」とは何を指すかと言  
えば、実は他愛のないことである。つまり以前見たことがなかった  
野鳥が（以前から居なかったという確かな証拠はもちろん無い）こ  
としはやたらと見えた、ということと、以前はたくさん居た鳥が（こ  
れももちろん不確かな推量だが）あまり居なくなった、と感

じることである。ツバメやスズメ

というごく近々の野鳥が、

なんか少ないなあ、と感じ

ると鳥インフルエンザの

ことがあるので気になる

ところだ。



ことしのトピックスは、佐島の本浦の池で、バンのヒナ5羽を確  
認したこと。全く偶然に、かつ気まぐれに池の様子を見に行っ  
たのが幸いだった。タドンのように真っ黒な、数センチほどの、孵化し  
たばかりのヒナが、親鳥のあとを一所懸命、水草を乗り越え追いか  
けている姿を見たときは我が目を疑った。そして今、同じ池にカイ  
ツブリが営巣し、卵を抱えている。

カイツブリは先年からこの池で孵化し、成鳥となっているのはお

なじみだから驚きはないが、なんと同じ池でヒクイナを見た。これは仲間が写真に収めているので絶対的証拠。そして、そして、同時期にクイナをも、一山超えた西辺の池の近くの水路で目撃。おいおいどうなってんの？あろうことかハシヒロガモも同じ池にいた。

やはり同じ頃ヒレンジャクが何日も逗留して、そこいらじゅうのピラカンサやクロガネモチの赤い実を食べまくって去っていったことなど、佐島や弓削はバードウォッチングの聖地になりそうだ。

深坂池にはカワセミのペアーが居着いている。やがてまた巣穴も



発見できるだろう。(昨年巣穴があった場所は、土手が崩れてきたので、いまは石積みで補強されてしまった)。

こんな有様をみると、

野鳥たちにとって、もともとあった楽園がどんどん狭められ、否応無しに、こうして人目の多い池にも飛来せざるを得なくなっているのではなかろうかと、うれしいような、心配なような複雑な気持ちになる。もちろん、ホントのところは、ずっと以前からこれらの鳥は飛来していて、繁殖等していたのかもしれないのだが・・・。

繁殖と言えば、ことしは4月10日、モズの巣立ちしたばかりのヒナ5羽を、土生の里山で初めて見た。え〜〜?!、モズもこの地で繁殖していたの？

う〜ん、こういうことが続くと、やはり環境異変なのかなあと思ってしまう。

ボルネオ島の青い稲妻 (part3)

松本敏和

三日目、待ちに待ったフリータイムの始まりだ。数種のオプションツアーの中から世界遺産の標高 4,095mのキナバル山を目玉とした『キナバル公園とボーリン温泉』に参加を決めた。熱帯植物の宝庫とも言えるキナバル公園と標高約 1,800mのキナバル山の登山口に広がる熱帯雨林は、この旅のターゲットのひとつであるサイチョウに会える唯一の可能性を秘めたツアーだと考えたからだ。

ホテルから2時間30分の車窓には標高が高くなるにつれ野菜や果物を作る段々畑が目立つようになる。熱帯地域では暑い平地より幾分気温の低い高地の方が野



菜や果物の栽培に適している。ガイドに世界最大の花「ラフレシア」

について問うと竹林と溪流のある薄暗い所で長い歳月を地下で成長し、地上に一様の葉を出してから2~3日で花を咲かせ、5日間ぐらいで枯れてしまう。ラフレシアの花は現地の人を探して金網で囲い自分の所有物にし観光客を案内して現金収入を得ている。見られる



確率は50%ぐらいだ。

ガイドが現地の人と話を  
をして笑顔で振り返り  
親指を立てて見せた。一  
人30リンキッドを支払  
うと竹で作った柵を一

部取り外し少年の後を黙ってついて行く。うっそうとした竹林を行くと溪流があり、そこに掛けられた竹の橋を渡りなおも続く竹林を進む。傾斜がやや急になりかけた薄暗い竹林に金網で囲まれたその花はひっそりと咲いていた。ラフレシアとツーショットの写真を撮ろうとするが、竹が邪魔して思うような構図にならない。鳥のことばかり考え望遠タイプのデジカメを持参したことを少し後悔する。キナバル公園の天を突くようなラワンの大木に架けられた吊り橋までの山道は、勾配が急な上に高地で空気は薄く呼吸は苦しくなるし、汗はあふれ出るし気がつくといつの間にか列の最後尾を歩いていた。

双眼鏡にデジカメ、テレコンバーター、図鑑、懐中電灯などを詰め込んだショルダーバッグは3kgを超える重さになり、このハンディーキャップを背負っての道のりは一層長く険しく感じられた。熱帯植物園に移動中、昼だというのに暗くなり、突然雷鳴が轟き、あたりを黄色く照らす、バケツを返したようなスコールの到来だ。途中で昼食を済ませ植物園に着く頃にはいつの間にか雨も上がり、辺りは白い霧につつまれていた。植物園とはいっても原生林に遊歩道を付け、ポイントとなる箇所に植物の案内表示を設置したもので温室などで囲うこともないし、珍しい植物を植えることもない。ガイドが植物の一つ一つを説明してくれるが、鳥がいないかと浮つく思う気持ちで、何一つ頭に入ってこない。唯一残っているのは、世界最小のランの花で肉眼では花とはわからず見過ごしてしまうほどだ。麓もボーリン温泉で汗を流し、車はホテルへと急いだ。

残念ながらサイチョウはおろか鳥の影さえ見られなかったが、世界最大のランの花「ラフレッシュ」や虫眼鏡がないと見えないような世界最小のランの花、天を突くようなラワンの大木と世界遺産のキバナ山などを堪能できたことは何よりと思う反面やっぱりたとえ一羽でもいいから鳥も見たかったというのが本音かも知れない。

(to be continued)



## 春に鳴く蝉

## ハルゼミ

最近、上弓削の高浜八幡神社の松林付近、松原海水浴場付近でジ



ー・ジーと蝉のような鳴き声を聞くことがある、偶然、先日、生名島に行ったとき、会員の上村芳弘さんに会い、「最近、ハルゼミがよく鳴いているよ」と

の情報を聞き、私もハルゼミという名前は聞いたことはあるが、実際に観察したことはなく、あの鳴き声が本当にハルゼミなのか、早速インターネットで確認したところ、「ハルゼミ（春蝉）・セミ科に分類されるセミの一種。日本と中国各地の松林に生息する小型のセミで、和名通り春に成虫が発生する。晩秋や初夏を表す季語「松蝉」はハルゼミを指す。成虫の体長は 35mm 前後で、ツクツクボウシを小さくしたような体型をしている。オスの方が腹部は長く、わずかにメスより大きい。翅は透明だが体はほぼ全身が黒色・黒褐色をしている。日本列島では本州・四国・九州、日本以外では中国にも分布する。」とあった。4月～6月にかけて発生するとのことであり、是非、見つけて写真撮影をしてみたいものです。会員の方で観察された方は、ご一報いただきたい。（写真はHPからの借用です。）